

靖国神社と戦争責任 日本人としてどう考えるか

憲法あれこれ 2

一橋大学名誉教授 浜林 正夫



小泉首相の靖国参拝に批判の声が高まっています。1985年に初めて公式参拝に踏み切った中曽根元首相までが反対を表明しているのです。6月28日付の朝日新聞によると、世論調査の結果、参拝中止を求める人が52%と過半数に達したといえます。ただちょっと気になるのは、中止を求める理由のうち、「周辺国への配慮」が72%と圧倒的に多いことです。

周辺国への配慮はもちろん大事ですが、それよりも日本人としてどう考えるのかということの方が、大切ではないでしょうか。靖国神社は日本の侵略戦争を美化し、A級戦犯を「ぬれぎぬを着せられ、むざんにも生命をたられた」殉難者として祭っているのです。

小泉首相は「靖国神社へ参拝したからといって、その戦争観を支持しているわけではない」といいますが、それでは小泉首相はアジア太平洋戦争をどういう戦争として考えているのでしょうか。

小泉首相は中国首脳と会談の際、村山元首相の言葉そのままに、一応の謝罪をしました。が、日本の戦争を侵略戦争として認めたく

ではありません。

またA級戦犯の合祀については「死者を差別しないのが日本の慰霊だ」といつていますが、靖国神社こそ天皇に背いたものは合祀しないとして、死者を差別しているのです。A級戦犯の1人として終身刑の判決を受け、のち仮釈放されて池田内閣の法相となった賀屋興宣は「日本人は自主的に戦争責任を判断する必要がある。あれだけの日本の歴史に対する汚辱と国民の惨害に対して、重大な責任者がいないはずはない。私はその1人である」といつています。

日本人の手で戦争責任を問えなかったことに、今日の問題の根源があるので。ドイツでは国際裁判のほかに国民自身が戦争犯罪を問う法廷を開きました。いまなお、私たちは日本の戦争責任を問いつづけるべきではないでしょうか。